



文部科学省

資料 2

科学技術・学術審議会 学術分科会  
人文学・社会科学特別委員会（第28回）  
令和7年12月5日

# 人文学・社会科学研究におけるDX・AI活用に 関する聞き取り結果

令和7年12月5日

文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室

# 人文学・社会科学研究におけるDX・AI活用に関する聞き取り概要

## 聞き取り期間

令和7年8月中旬～11月上旬

## 聞き取り対象者

人文情報学者（歴史学）3名、人文情報学者（哲学）、情報学者（DH）3名、情報学者（AI）2名、  
哲学者2名、歴史学者、言語学者……………計13名  
人文学系研究機関、社会科学系研究機関……………計2機関

## 聞き手

事務局（文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室）

## 聞き取り事項

- ① DX・AI研究の推進方策
- ② DX・AI研究を支える研究データ基盤
- ③ DX・AI研究に関する人材育成
- ④ DX・AI研究における権利問題・倫理的課題
  
- ⑤ 人文学・社会科学におけるAI活用を取り巻く近年の潮流
- ⑥ DX・AIの活用により人文学・社会科学の研究がどう変わっていくのか

※対象者によって聞き取った項目は異なる

## 聞き取りの際にいただいた主な意見

---

- 若いを中心、**AIを活用することは当たり前となっている。**
- 研究が加速化することで、**研究者の時間の使い方に革命的な変化をもたらす**。また、**研究者の評価の在り方にも変革をもたらし得る。**
- 人文学・社会科学へのAIの普及を見据えたとき、**マインドセットの転換が必要となる**。
- 今後は、多くの**人文学者、社会学者がAIへの知識を深めておくことが求められる**。
- AIは人文学・社会科学の研究の在り方を変えるものであり、**研究に必要なものも従前から変化する**（例：時間→資金）。

## ①DX・AI研究の推進方策

- ・ユースケースを創出して、DH／AIの凄さを実感してもらうことが必要。
- ・単に人文学におけるAI研究の手法を説明するだけでなく、具体的な成功例を示すことが必要。
- ・自分は個々の研究を深化させることにAIがどのように資するのかあまりピンと来ていない。まだまだ使い方が分からず、研究にしても教育にしてもどうしたらよいのか分からない。
- ・成功例だけでなく、権利関係等、研究を進めていくとどのような問題が発生し得るのかという事例を示すことが必要。
- ・AIが出した結論を検証するのは人間しかいないため、**検証ができるような教育環境**を整えることが必要。
- ・AIやDHについてまとめて学習できるサマースクールのような教育プログラム。
- ・大学教育における必修科目化と、それを実施した大学に対するインセンティブの付与。
- ・個人や小規模機関に所蔵され眠ったままとなっている資料をデジタル資料に引き上げていくための**コーディネート人材**。
- ・研究に活用できるツールが必要。TEI等の共通規格に準拠した操作ができるアプリケーションなど。
- ・APIを用いた**AI研究には相当な資金が必要**。
- ・生成AIをローカル環境で機能させ、学習データもローカル環境で完結させることができる環境。
- ・データ化、アーカイブといったDH特有のプロセスに対する評価、ステータス、インセンティブ。

## ②DX・AI研究を支える研究データ基盤

- ・自治体の資料だけでもオープン化できないか。
- ・個人や小規模機関に所蔵され眠ったままとなっている資料をデジタル化した際に保管するストレージが必要。
- ・研究に活用できるツールが必要。TEI等の共通規格に準拠した操作ができるアプリケーションなど。
- ・データリポジトリ等の、AI研究における**データインフラストラクチャーは重要**。
- ・人社研究者の個人PCにはその人が作った膨大な研究データが眠っている。これらをAIに接続させることができれば状況が一変するのではないか。そのために、データを共有する技術の開発やプラットフォームの構築、公開へのインセンティブ付与といった支援が必要。
- ・AIのモデルを他国に依存している状況だが、自国で盤石な体制にしておかないと、研究データが持ち出されるだけでなく、日本としての自立性も失うことになるのではないか。
- ・AIモデルそのものを作ることについては、諸外国の大規模モデルにはかなわない以上意味がないのではないか。そのため、**課題とすべきはAIに学習させる情報の厚みや、コンテクストエンジニアリングの領域ではないか**。
- ・TEI等のDHに関する国際規格は従前から存在しているが、必ずしもAIに分析させることを前提にされていないため、**現在のデジタルデータはAIで分析させるには不十分。データを高精細化し、レファレンスを付与できるよう組み替える必要がある**。
- ・AIを用いた研究ツールを自力で作成したが、**仮に何の土台もない状態で開発を行つたとしたら、相当ヶ月の期間と1,000万円規模の予算が必要になると**考えられる。

### ③DX・AI研究に関する人材育成

- ・ 人文学者はAI関連の知識を極めるのではなく、データの作り方や、統計学、プログラミングといった幅広い内容を常識的な範囲で把握しておくことが必要。
- ・ 人材育成においては、人文学と情報学のどちらが主かというのを見失ってはいけない。
- ・ **多くの人社研究者がAIの仕組みを理解していることが必要。** 人社は分析過程の検証が必要なため、**技術的な手法の理解は必要。**
- ・ 現在はインターネット上の動画教材などに簡単にアクセスできるが、そういうのがあるから何とかなるということではなく、**人とコミュニケーションを取りながらないとDHはできない**と思う。
- ・ **DHの人材育成は、分野横断的なチームを形成しないと学生の多様なニーズに対応できない。** 教育体制としてもチームの構築が必要。
- ・ 本学のDH講座の履修希望者は割といる印象だが、指導教官が少なく、教室のキャパシティ的にも講座の規模を拡大することは難しい。
- ・ 人文学とデジタルのどちらの知識もバランスよく持つ研究者が沢山いた方が良い。DH人材とは、人文学と情報学のそれぞれ専門性をもった研究者のチームの中での橋渡役と捉えている。
- ・ **DHは純情報系の知識や経験も必要だが、担い手が少ない。**
- ・ AIへの関心が高い学生が増えた一方、トレーニングプログラムが整備されていないことと、自分は文系だからというマインドセットが邪魔しているように思う。
- ・ 人文学者はテキストから情報を読み取る能力に長けているが、AIがテキストを解析した結果として返してくるグラフなどの**数理情報を読み取ることは苦手としていて、何とか克服したいと思っている研究者が多い。**
- ・ AIは他の技術と異なり、進歩のスピードがとても速いことが特徴で、誰もが使うことのできる環境が一気に訪れた。それは**仕組みを知らなくても使うことができてしまう**ということで、**それはある意味危険なこと。** だから**基本的な知識を各研究者が身に着けていることは重要。**

## ④DX・AI研究における権利問題・倫理的課題

- ・ **権利関係がネック**。日本の人文学においては、重要な資料である辞典類は出版社が権利を持っているため利用できないということが課題。
- ・ **情報解析のためであれば著作物を分析することは可能なのだけれども、そのことが研究者に浸透していない。**
- ・ 資料を保有している側も権利関係を理解していないのではないか。
- ・ 権利関係に問題があるというより、特に博物館や寺社では、拝観料を徴収して見せている資料をデジタル化して誰もが見られるようになるのは嫌だといった**心理的なハードルの方が、利用許諾を得られない要因**だと思っている。
- ・ 日本でも各大学に1人くらい著作権について相談できる人材がいると良いのではないか。**リスクマネジメントを担当しているURAが、権利関係にも対応できるようになるとが現実的**だろう。
- ・ 営利目的／非営利目的で利活用に係るルールを分けることと、そのことへの理解が研究者と国民双方に広がれば、AIを研究に活用することのハードルが下がるのではないか。
- ・ 手作業で厳密にテキストと対話し、先行研究を踏まえたじっくりと分析する、といった研究スタイルが尊ばれているような風潮がある中、AIをがんがん使って1週間程度で論文化したと言ったら、変な先入観を持たれるのではないかと恐怖を感じるので、院生や若手研究者は活用しにくいのではないか。
- ・ AI for Researchという考え方があるが、ともすると人間の怠慢が助長されるという懸念が大きくなる。人社研究においても、存在しない文献の引用や、倫理に反する情報の出力など、コンピューターサイエンスと同様の問題が顕在化してくるだろう。AIの判定は完全ではないので、最終的には人間がチェックするという意識を働かせることが重要。

## ⑤人文学・社会科学におけるAI活用を取り巻く近年の潮流

### <国内>

- 考古学や人文地理学はデジタルを積極的に活用している。文学や歴史学についても、若手を中心にデジタルへの関心が高まっており、学会が主導してDHを盛り上げようとしている。
- LLMを活用した研究は増えている。また、AIへの理解が進んだことで、**人文学者からのAIへの否定的な意見は減ってきていている。**
- かつては、DHは技術であって学問ではないと否定的な意見を聞いたが、世代交代を経たからなのか認識は変わりつつあり、**DHが学問ではないと思うような人は減っている。**
- 最近では中堅・シニアの歴史研究者でDHやAIに関心を持っている人も多く、DH関係は自分より知見を持っているだろうということで、実働部隊として若手研究者を入れて研究チームを作ろうとする人も増えている。
- 学生を取り巻く環境自体が、既にAIを使うべき／使うべきではない、という状況ではなく、**AIを活用することが当たり前**となっている。

### <国外>

- DHは欧米が主導している。我が国でも最近になって各大学にDH関係の教育・研究プログラムが走るようになってきたが、ドイツでは早くから各大学にDHセンターが設置されている。
- DHの進み具合は国ごとに異なっている。中国はDHに力を入れており、コンソーシアムを形成して政策的にDH教育を進めている。
- 国際DH学会においては、ヨーロッパの研究者からはあまりAIへの言及がなかった一方、中国の研究者は積極的にAI研究について触れていた。
- 海外のDHカンファレンスでは、カルチュラルヘリテージ・文化遺産の保存やアクセシビリティを高めたり、データベースを作成したり、検索システムを構築したりすることが関心の中心というもので、伝統的な人文学の手法であるテキストの精密な読解にAIを活用する事例はまだないと思う。

## ⑥ー1 DX・AIの活用により人文学・社会科学の研究はどう変わっていくのか

- ・歴史学においてはこれまで人間が捌けなかった膨大なデータをAIによって計量的に解析するという手法が流行するだろう。
- ・人間では見切ることのできないデータを見られるため、人文学・社会科学においては、AIが新発見の候補を出し、人間が適否を判断するという研究の仕方に変わるのでないか。なお、自然科学はAI自身が新発見 자체を行うという違いがあると思う。
- ・これまでの人文学は何かを見つけることが研究の醍醐味だったが、今後は、どうしてそのような情報がその文献に書かれていたのか、あるいは別の文献では記載がなかったのか、といった背景に関する分析や解釈にまで研究の方向性がシフトするのではないか。
- ・特に社会科学はシミュレーションが高速化する。
- ・研究時間が1/10程度になった。
- ・発表資料の作成が非常に早くなった。哲学の論文なども今まで3～4ヶ月かけていたものが1週間で書けるようになった。読むのに丸一日かかるような論文でも30分程度で読めるようになったり、論情報収集も格段に楽になった。
- ・AIの使用が一般的になってもAIにすべてが代替されるわけではなく、あくまで研究者としてどういうタスクにどれだけ労力を割くかという研究時間の使い方にAIが革命的な変化をもたらす。
- ・翻刻や注釈といった、これまで学術的業績とみなされていた行為がAIによって可能となることで、研究評価の観点が変化するだろう。

## ⑥－2 DX・AIの活用により人文学・社会科学の研究がどう変わっていくのか

- ・ DHの場合は、人文学者もプログラミングなどをきちんと勉強しないといけないという側面があり、そちらにウエイトを置いてしまうと、人文学を勉強する時間が減ってしまうという本末転倒のようなジレンマが起きていた。それが、AIがプログラムも書けるようになり、そちらにお任せできるようになったことで、ジレンマの解消が期待される。
- ・ くずし字解読アプリとオープンAIを授業でも使用しているが、整理された史料であれば無償のソフトでも8～9割の精度で解読できる。さらに、アプリで出力したテキストをそのままオープンAIに読み込ませて要約させたところ、ほぼ正確な答えを出した。アプリが間違えて出力した部分もAIが上手く補正できていた箇所もあった。これまで歴史研究には無縁だと思っていたAIが、研究の筋道や推論を立てたり古文書の意味の導出を任せられたりする可能性がある存在だと気付いた。
- ・ 社会科学でも、伝統的なデータ解析の分野で機械学習が導入されモデルが拡張されたり、テキストデータ・自由階層のデータの分析がこの20年で格段に進んだりしているので、**AIの発展は社会科学にも寄与するものと思う**。研究テーマや仮説の設定にも生成AIを活用している研究者もいらっしゃる。
- ・ AIはあくまで議論の相手として価値があるので、研究者本人の役割や研究の本質的な部分は変わらない。AIはまだ誰も気づいていない新しい概念を見出すこと自体はできず、そこを担うのはあくまでも研究者。